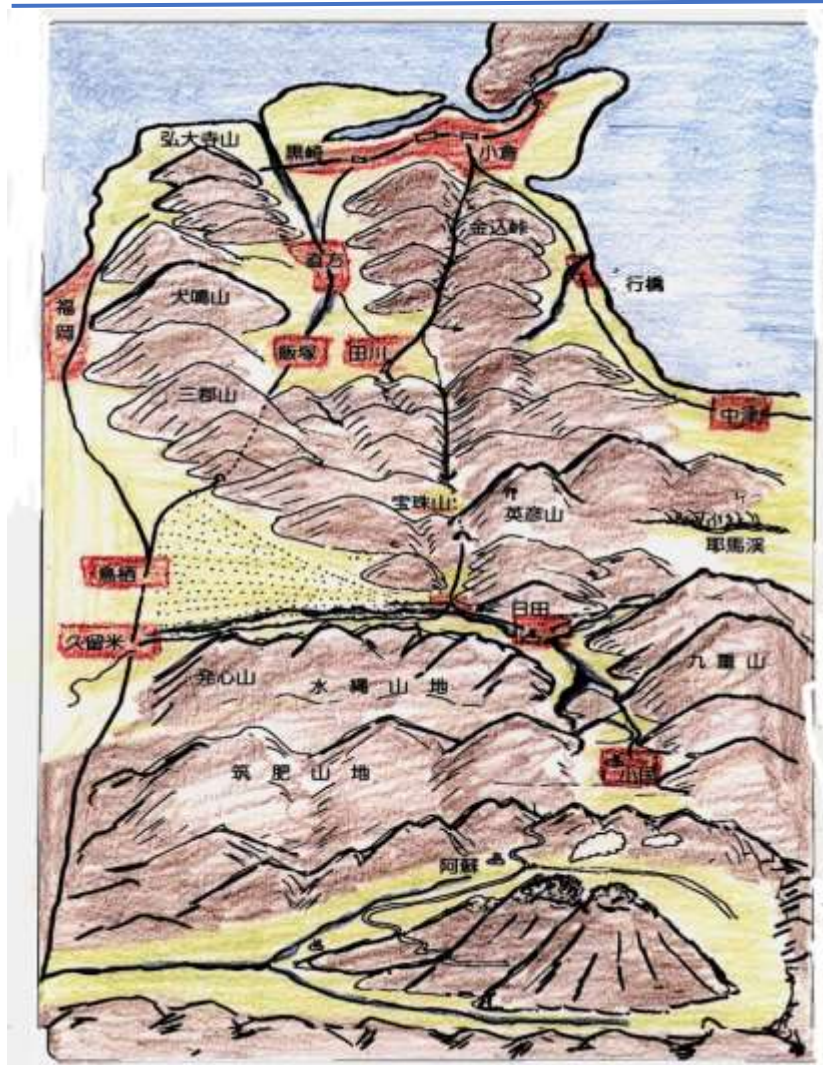


玄海灘から阿蘇山へ 1999年10月



★ 九州縦断走り旅第一弾は、「玄界灘から阿蘇山へ」にした。

せっかくの優雅な旅なのだから何かテーマがあった方が楽しい。東北の時には「芭蕉を追って」とか「みちのく一人旅」とかした。九州の「へそ」である阿蘇山にただ登ったのではおもしろくない。日本海の玄界灘から山また山をぬい、筑後川を越えて行くことにした。本心は九州縦断コースで一番短そうなのが阿蘇を越えるコースだった。しかしそれは甘いワナだった。近くて楽な道なら昔からそこが街道になったはずだ。九州縦断の街道は海沿いに迂回している。それには理由があったのだ。

今回は、東海道でも北海道でも一緒だった下島伸介さんに同行を願った。我が家では最近「ボケ」症状の出てきた私の一人旅をいやがるようになってきている。携帯電話を持たせても使い方が分からない、山の中では電話は通じないので、人のいないところでのたれ死んでいたら探しに行くのに面倒だからだ。もともと山やで慣らした下島さんの強さはこれまで十分に見ている。彼と一緒になら、行き倒れてもおぶって里まで連れてきてくれるだろう。我が家では最近ではめずらしくきげんよく送り出してくれた。

★ 10月1日（金）

■ 小倉から金辺峠

福岡空港経由で小倉駅前のホテルに入る。前回の山陽編はこのホテルが終点だった。駅前にでて小倉名物のお好み焼きで夕食。福岡ダイエーホークスが優勝したので飲み屋は盛り上がっているが、この日は中日ドラゴンズが優勝を決めた。「巨人が優勝しないと経済は活気づかない」などなどと九州人らしくない発言をするオヤジがいた。東京からの単身赴任者だった。その地方に文化があるのに、東京的発想を押しつけてはいけない。野球と経済なんか関係づけるな。と怒っていたら東海村で「臨界」状態が続いていると何やら分けのわからない報道が流れた。よく聞いていると本当に放射能の臨界が起こっているようだ。東海村といっても、大きな原子力発電所はないはずなのに、どう考えてもわからない。しかし、本当に放射能事故では最悪の状態が起こっているようだ。まあ、原子力の専門家の有馬さんが大臣だから何らかの手だてをするだろうが、これだけの大事故が起きれば内閣はぶつつぶれるだろうだな。私が家に帰ったところでどうなるものでもない。「離れているからまあうちの家族は大丈夫だ」と二人とも自己中心主義的考えで計画は続行することにする。

朝6時出発。東京より1時間ぐらい夜明けは遅い。駅の下をくぐってモノレ



ールの下にでる。小倉といえば「無法松」、まず彼の記念碑に詣でて香春口からトロトロと走り出す。最初の目的地は**金辺峠**を越えた香春町、かわらと読む。ついでに金辺峠は「きべとうげ」だ。九州の地名は難しい。

10月1日は「都民の日」でお休みだが、小倉は平常の金曜日。郊外へ出るとそろそろ出勤、通学の時間になる。人が働いているときに遊んでいるのは多少だが気が引ける。1時間走って守恒駅前のファミレスで朝食。

今回は二人でのんびり行こうと約束してある。さもないと競争して共倒れになりそうだからである。モノレール線が終わったところからは紫川沿いに高速道路下までのんびり走る。8時半石原町で**J R 日田彦山線**に合流する。駅名や山の名前は「英彦山」だが、路線や川の名前は「彦山」になっている。本日はこの線に沿ってどこまでも進むことになる。

学校の前で校長先生が登校する生徒一人づつ声をかけている。正面左手の高台は日本で有数のカルスト地形で有名な**平尾台**。行ってみたいが、一日かかるので遠くから眺めるだけ。呼野をすぎると金辺峠。2本のトンネルを旧道と新道だと判断してトンネルを通ったが、失敗。昔の採銅所から上に登ったところに旧道のトンネルがあったらしい。街道研究家にはなれそうもない。峠で9時20分。

■ 香春から英彦山駅へ ※

金辺峠から快適に下って採銅所という J R 線の駅前で一休み。10月というのに30度を超える暑さ。東京から嫁にきたお婆さんの店でジュースを買う。

「走って阿蘇まで行く」と言ったら不思議な顔をされた。下島さんは九州には九州一周駅伝など「走る文化」があるはずだというのが、ここでは不審者の扱いだった。右手に立派な形をした香春岳がみえる。味わいある旧道を進み、清瀬橋で金辺川をわたる。10時35分。

ここから鉄道、道路も田川市に向かうが、我々は中津原を通って彦山川に |

4 沿い添田町に向かう。暑い暑い。コンビニを見つけてはコーラ、ジュースを買う。

川の両側はいまが刈り入れの最盛期を迎えた田んぼが広がっている。先日の台風 18 号の影響か、かなりの稲が倒れている。早く刈り入れなければ腐ってしまうので農家も大変だ。添田町で 1 時。暑さに負けてお寺の門前でダウン。しばらく靴を脱いで休憩。その間に下島さんが冷たいコーラを買ってきてくれる。今回は給仕付きの走り旅。こんな気楽な旅はない。20 分ほど休んで、出発するが暑さはまったく衰えない。10 キロに 2 時間もかかって 3 時に J R 線英彦山駅前に着く。ここまでで道路標識は 47 キロ。平均時速 5 キロ程度しか進んでいない。これは遅い。英彦山は日本では有数の由緒正しい修験道の山。この山へ行くには英彦山駅から線路をくぐる。

■ 研石峠には道がなかった

我々は右手の深倉川に沿って釈迦岳の鞍部の研石峠（きりいし）を越えて宝珠山村に出ようという計画だ。ほぼ鉄道のトンネルの上を越えることになる。国道 211 号線は焼き物で有名な小石原を迂回するので、研石峠は昔の峠越えの山道しかない。九州の山の様子が分からないが、今回は二人だし、テントも持っているので突き進むことにした。

深倉の集落に 3 時 45 分着。畑で働いているおばちゃんに聞くと、この道が研石峠への道だと言う。しかし最近通った人はいないとのこと。指導標も案内板も出ていない。歩きはじめたらすぐに林道を覆う倒木に出会う。さらに切り倒した杉材も無数に道を覆っている。障害物競走どころじゃない。走友の田口さんを連れてきたら怒り狂うような道だ。倒木帯が終わったら、こんどは道がなくなった。笹に覆われてかすかに踏み跡がみえるが、ここ数年は人が歩いた気配はない。引き返すかどうかの決断が必要になった。しかし私の辞書に撤退という言葉はない。前に進むのみだ。下島さんは「三輪さんの言うとおりにする」と一蓮托生！

短パンの足に笹と茨が容赦なく攻撃してくる。もう走るとか歩くとかの段階ではない。笹原との格闘しながら進む。東京周辺なら尾根に出れば必ず道があるが、ここではそうではない。かすかな踏みあとをはずすと、本当に遭難の二



文字だ。走り旅にきて山の中で遭難したら、何を言われるかわからない。

不安なまましばらく道を探っていく。尾根を回り込んだところで突然鹿の死体に出っくわす。動物よけの網に角を引っ掛け、外れなくなり死んだらしい。横たわった鹿は巨大だ。体の様子からはまだ死んだばかりのようだ。このまま暗くなったら俺たちも同じ運命だ。

しかし動物よけの網があるということは人がきたことがあるということだ。しばらく足ウラを目にしてかすかな踏み跡をたどると、コンクリートの建造物が出てきた。ヤッターこれで生還。登りついたところが研石峠の林道のトンネル入り口だった。5時30分。天才的ルートハンティングの成果だ。まだまだ二人とも野生の感覚は衰えていないと自画自賛。わずか1時間半の空間喪失だったが、最近の山歩きではえがたい充実感だった。

■ 九州人の人情にすぎる。

トンネルからは舗装道路を一気に筑前岩屋駅に向けてかけ下る。**竹集落**の棚田が美しい。かなりのスピードでかけ下ってきたが、筑前岩屋駅の近くで真っ暗になった。近くにキャンプ場があるというので、行ってみると昨日で閉鎖したばかり。もどると場所を教えてくれた人が気の毒がって、「うどんを食べていけ！」と勧めてくれる。昼食もともに食べていなかったの、ありがたごちそうになる。料理をしてくれた奥さんはさぞご迷惑だったろうが、そんなそぶりも見せず接待して下さった。今の時代にまだこんな人情が残っていたなんて、うれしくて涙が出そう。うどんの合間に「鹿が死んでいましたよ！」という「どこで？」と聞く。「研石峠の先ですよ」と言うと、近所の人を集めて軽トラックで急いで出て行った。きっとジビエにするのだろう。

和田さん一家に教わった**千代丸温泉**の伊東旅館に泊まる。6000円で食べられないぐらいのごちそうが出た。

九州縦断第一日目は暑い、痛い、うれしい、おいしいの日だった。距離はせいぜい60キロ程度だったが充分に満足のいく一日だった。

第2日目 10月2日(土)

■ 千代丸温泉から日田市

6時に旅館を出て、朝靄の中をかけ下る。2日目にしては快適に走れるのは昨日それほどの距離を走っていないせいだろう。あるいは昨日の和田さんの親切がエネルギーになったのか、こんな気分のいい寝起きは久しぶりだった。大行司という集落で昨日分かれた国道211号線に合流する。**宝珠山駅**が大分県と福岡県の県境だが、こんな集落のなかで区切っていいのだろうか。鉄道はそのまま川沿いに筑後川に向かうが、我々は山田町経由で日田に向かう。峠越えの道は気持ちがいい。途中豚の飼育場で臭いがきつかったが、それも愛嬌。峠を降りて再び登りかえすとそこは畑が広がっていた。ブドウの出荷場で一房買う。300円で巨峰が食べきれないくらいほどある。甘い汁に浸っているうちに、日田市へ向かう道はずし、貞清集落に出てしまった。朝のラッシュの車と一緒に国道212号線を日田市に向かう。昔は天領だった**豆田町**にはいい町並みが残っている。日田は温泉の町かと思っていたが、他にも見所はあるのだ。駅前のファミレスで朝食。千代丸温泉からはほぼ20キロを3時間ほどで来た。朝にしては快調だった。今日の目標は**筑後川**にそって**小国町**へ向かう。小国までは40キロだから、全部で60キロの走り旅。今日は気楽なコースだ。



■ 台風の被害

筑後川は下流では筑紫二郎とよばれる大河だが、日田市街の上流では玖珠川と大山川とよばれる。私たちは大山川にそって登り、とりあえず松原ダムをめざす。川の両側には**国道212号線**と旧道が交差しながら走っている。10月になったのに今日も30℃を越える暑さ。旧道には諸処に水がわき出している。頭から水を浴びて涼を求める。

旧道はところどころで通行止めになっている。崖崩れのためだ。電信柱は途中から折れている。前の週九州を通過し不知火地方に高潮をもたらした台風

18号の被害らしい。東京にいと、「また台風か」程度にしか感じないが、今回はかなりの被害をもたらしている。自分の足で見てみないと実感はわかない。政治家さんは自分の足で地方を回らなければいけません。川沿いの道は景色が似ているのであきてくる。川を離れて後迫という集落にはいってみる。九州はいま**彼岸花**の真っ盛り。田や畑の土手は朱色一色に染まっている。人の臭いのするところはなにかほっとする。鎌手で再び川沿いに出て、変哲もない道を走ったり、歩いたりする。こんな道は一人でいるとすぐにあきるが、今回は相棒がいるのでたわいのない話をしながらすすむ。旧道はダムの手前で急坂をのぼる。ドライブインには観光バスが並んでいる。汗だらけで、食事をするのには気が引けるので、わき水をかぶり、柿を一ついただいてダム湖をこえる。ここから杖立温泉に向かう道路脇にはわき水がでており、その度に頭から水をあびる。

■ 快調な下島さん

ダムで12時半。出発して6時間半経っているので、私の足はかなり疲れがたまっているが、下島さんは快調そのもの。中山道や日本アルプスのさらさら越えなどの**ジャーニーラン**を快調にこなしている彼にとっては一日60キロ程度の走り旅はちょっとその辺のお散歩程度の気分かもしれない。昔テニスをやったことがあるが、下手な人とやるのは気楽だが、うまい人に相手をしてもらうのは、とても気疲れした。私よりはるかに実力のある下島さんにとって、こんなにノタノタと走るのは欲求不満になるのではないかと、ちょっとは気にかかるのだが、私の実力はこの程度なのだからと居直るしかない。私の実力を承知で来てくれたのだから、悪いけど私にペースをあわせてもらうしかなかった。

杖立温泉は川沿いの温泉街。山の中だが温泉旅館が並んでおり、このあたりではなかなかの温泉のようだった。共同浴場もあるが、今回は素どおり。杖立温泉から小国町宮原まではほぼ10キロ。1時間40分で到着。途中下城の大橋の上で雨が降り出した。雨具取り出しながら標識をみると「**北里柴三郎記念館**」という文字が見える。あのエライ医学者はこの近くの「北里」の出身らしい。歩いてみるといろいろな発見がある。

記念館は無視してそのまま小国にむかう。3時。雨は小降りだが、夜には激しくなりそうな気配だ。今回はテントを持っているが、雨の中ではあまり使いたくないの、宿を探さなくてはならない。しかし我々が目指す阿蘇方面の道筋には旅館などありそうにもない。

幸いなことに雨はやんだので、**南小国町**まで行くことにする。

■ 雨がひどいのに宿がない。

30分ほどで南小国町営のドライブイン「きよらかアサ」につく。とりあえず腹ごしらえして、次の行動を考えることにする。食堂にはいると「とりあえずビール」。走友の浅井さんや原さんはマラソンの途中でも昼食時には必ずビールを飲む。私も一度だけまねをしたことがあるが、道路がぐるぐるまわり始め、臉はくっついてくるので二度とやりたくなかった。ということは南小国で今日は終わりだ。銀河高原ビールを飲んでいると、下島さんが「外を見て！」と言う。なんとバケツをひっくり返したという表現通りの雨。池の鯉が飛び跳ねている。近くには**満願寺温泉**や**黒川温泉**がある。その宿に片っ端から電話してみるが満員。今日は土曜日で、黒川温泉祭りだという。だんだんとテント泊の可能性が高くなってきた。

近くに町営の温泉館「**きよら**」があると聞いたのでそちらに移動。そこでもう一度作戦の練り直し。偵察をすると温泉館のとなりに今は使っていないバーベキュー小屋がある。窓ガラスはないが屋根はしっかりしている。バーベキュー用のかまどもある。

これはいい。温泉にゆっくり浸かって暗くなるのを待つ。町外れなので温泉客がいなくなればだれもこない。雨の中、下島さんが町まで買い出しに行ってくる。

「肉を買ってバーベキ



ユーやりましょうか？」という下島さんを、

「勝手に借りるんだからそこまでやったらまずいんじゃない」と説得。

再び、とりあえずビールで乾杯。小屋の中のテントは暑くて寝むれなかった
ので、しばらく小屋の土間に寝ていたが、夜中に冷えてきたのと蚊も小屋の中
に避難してきたためテントに潜り込む。

下島さんがもらってきた段ボールの下敷きは快適。無理に宿をさがさなくて
よかった。夜中屋根をたたく雨の音はやまなかった。

10月3日(日)

■ 阿蘇外輪山へ

目が覚めたが、雨はまだふっている。しかし人が来
ないうちにバーベキュー小屋から撤収。雨具をつけて
出発。いつもの山用ゴアテックス雨着は完璧なのだが
重いので、今回御徒町の安売り屋でゴルフ用の薄い雨
着を買ってきた。こ

れはなかなか快適だった。そば街道とやらを阿蘇の外
輪山に向かって昇っていく。途中に野草園がありワレ
モコウが咲いている。走り旅3日目になると、脳

細胞がだいぶ破壊されているので「ワレワレモコウ」(牧野植物図鑑)という
漢字が思い出せない。そば街道は「こんな道だれが通るのか？」というよう
な寂しい道だ。二軒しかないソバ屋のうち一軒は廃業したようだ。雨の中、筑
後川最後の大滝というのを遠くから眺め、ひたすら阿蘇をめざす。

2時間ほどで雨はやみ、外輪山の上を走る **ミルクロード** の交差点に9時につく。
ほぼ20キロを3時間で来た。昨日と同じ快調な歩み。ここから内牧温泉
への下りはすごい急崖だ。阿蘇の外輪山の外側は緩やかな傾斜だが内側はスパ
ッとキレ落ちている。自動車道はヘヤピンカーブの連続だ。歩道よりヘヤピン
カーブを走った方が早そうなので一気にかけ下る。45分で下りきり、食事に



するつもりだったが温泉街の朝は遅い。しかたないので阿蘇駅まで行くことにする。

阿蘇の**カルデラ底**である阿蘇谷はひろい。とても火山のなかにいるとは思えない。広い畑の真ん中を走って、**JR 豊肥本線**の阿蘇駅まで行く。駅前には温泉がある。10



時ちょっとすぎ。雨はやんだが、まだ阿蘇中央火口は雲の中に隠れている。

■ いよいよ阿蘇登山

駅前の案内所で様子を聞くと、いまは火口への立ち入りは禁止でロープウェーは止まっているという。「歩いて登るのもむりか」と聞いたのがいけなかった。短パンとTシャツ姿をみて、

「そんな格好じゃむりだ。登山者でも厳しいのに。上は寒いんだから無謀だ」と言われた。私は「走って」じゃなくて「歩いて」とかなり譲歩して尋ねたのだが、話は通じなかった。

朝飯をしっかり食べて、登りは始める。16 キロと書いてあるがこれは自動車道路。歩く道は直線なので半分ぐらいだろうと見当をつける。登るに従ってだんだん晴れてきた。しかしどうみても地図にある頂上への登山道はみえない。先日の研石峠の時にも感じたが、九州にはそんなにたくさんの登山者はいない。車の道は整備されているが歩く道までは手が回らないのだろう。

登山に来たのならもっと情報を集めただろうが、今回は走り旅。状況のわかった安易な道に行く。ロープウェー終点までは牧場の中に細い舗装道路がつけられている。後ろを振り返ると朝通ってきた大観峰がみえる。よくまああんな所からやってきたものだ。放牧された馬に眺められながら、ススキの原を登っていく。さすが世界一の火山で、あちこちに巨岩が転がっている。遠くにロー



プウェーが見える。右手に**杵島岳**がみえる。途中までリフトがかかっている。

山上はだだっぴろい草原だ。我々の目指す中岳は確かに煙を噴いている。ロープウェーも動いていないし、登る人の姿も見えない。**阿蘇山上神社**にお参りして、阿蘇登山終了。阿蘇駅からほぼ2時間だった。とりあえずここで玄

界灘から阿蘇山への旅は完了。

休暇でやってきたイギリス人とであう。日本語がうまいのは英語のアシスタントとして2年間中学で教えていたそう。彼に我々がのぼってきたコースを教える。バスできたがおもしろくないので歩きたがっていた。日本人の若者は歩くのをいやがる。イギリスの若者を見習わなくちゃ。

■ 南郷谷、白水の里へ

2キロほど先の烏帽子岳の麓に阿蘇と言え「**草千里**」の草原が広がっている。ふだんなら行く先とは反対の方向へ戻ることはしないが、今回は時間も気分もたっぷり余裕があるのでひとっ走りしてみる。**火山博物館**やレストランが並んでいるが、そこは横目で見て、草千里の原っぱをみる。しかし噴煙をあげる中岳と比べると、草千里といってもいかにも箱庭的な美しさで、ダイナミックな広大さはない。これぐらいの大きさの方が日本的な趣味に合うのかもしれない。

再び国道に戻って**白水村**に向かって下る。途中から登山道にはいるが、阿蘇から登ったときと同じように牧場の中の舗装道路である。眼下には**南郷谷**がみえるが、朝方通った阿蘇谷に比べると狭く、川が深く谷を削りこんでいる。同じぐらいの高さにある外輪山は北部より険しい。明日行くはずの峠を検討する。天神峠か清水峠が良さそうであるが、昨日のように登山道が整備されていない可能性がある。なので地元で情報を得なければならないだろう。

阿蘇登山道路から離れたのが2時45分。快調にかけ下って1時間で南阿蘇

鉄道の**中松駅**脇につく。そばのガソリンスタンドで聞くと、すぐそこに久木野村営の温泉「**四季の森**」があるという。

「すぐそこ」といっても2キロもあった。車になれた田舎の人は、距離感覚が違ふ。今の時代は都会の人より田舎の人の方が歩かない。

今日は日曜日なので泊まり客は少ない。走り旅で温泉に泊まることをこれまで何回か考えたが、なかなか実現しなかった。今回は杉材をふんだんに使った豪華な温泉宿だ。振り返ると今日通ってきた阿蘇山がすっと立ちはだかっている。我らの足も大したものだ。あの山を越えてきたのだから。いやいや今日はその前に外輪山も越えたのだ。エライ。

いつもは誰もいないから、自分で誉めるしかなかったが、今回は相棒がいるのでお互いに誉めあう。**阿蘇五岳**をながめるテラスにでて**銀河高原ビール**で何回も乾杯。豪華な食事付きで7000円。

温泉で、土方をやっているというニイチャンから、「すごく鍛えた体だ」と誉められた下島さんはますますご機嫌だ。私はこの三日間で体重が二キロも増えている。毎日適度な運動をして食事が進むからだ。体力勝負をしているニイチャンに誉められるような体を作らなくてはいけないな。

10月4日（月）

■ 阿蘇南の外輪山を越える

四季の森の親切なマネージャーが外輪山と九州自然歩道の情報をくれた。明日は**グリーンピア南阿蘇**の上をとおり舗装道路から**駒返峠**に行くことにした。この峠までは道がついていることは確認したが、その先はどうなっているか知っている人はいなかった。しかし外輪山を巡る道と清和村に下る道は九州自然歩道だから整備されているはずだと勝手に判断して、駒返峠コースをたどった。

6時半、宿をでて快適に登り始める。最初は舗装道路。背後に昨日登った阿蘇の山々が見える。一番立派にみえるのが**御竜門山**（おかまどやま）だ。遠くに奇妙な形をした**根子岳**がみえる。この山は**中岳**などよりもはるかに古い時代に噴火したので浸食がひどく奇妙な形になっているのだろう。

舗装道路を離れて山道にはいる。うっそうとした森の中に**ツリフネソウ**の薄いピンク色がかわいい。山ヤの下島さんは植物に詳しい。今回はいろいろな花

の名前を教わった。気分よく登っていくと案外簡単に峠に出た。

宿を出てから1時間15分。そこには立派な指導標が立っていた。登ってきた道を横切るのは外輪山をめぐる自然歩道で整備もゆきとどいている。我々の進みたい方向にも矢印がついている。「あとは下りだ」と気分は楽になったが10メートルも行かないうちに道がなくなった。引き返し、もう一度みても矢印は引き返した方向についている。おかしい。そんなはずはないと変わり番こに数回往復するが道は見つからない。

先日うどんをごちそうしてくれた和田さんが、「道が分らなくなったら木に登って竹藪を見つければいい」と教えてくれたが、見渡したところ高い木もないし、竹藪らしきところもない。九州の山は深い。まさに

「分け入っても分け入ってもあおい山」

山頭火の心境だ。彼がこの句を作ったのは熊本在住の時で、**高森峠**を下りた**馬見原**あたりの山々だった。外輪山の自然歩道を東へ行けば**多津山峠**、**天神峠**、**清水峠**、などがある。どれか下れる道があるだろう。どうしてもなければ昔通った高森峠まで行けば車の通る峠がある。そこまで行かなければならないかもしれないと覚悟をきめて出発した。5分ほど登ると、そこには九州自然歩道の道標があり、**東大矢**に下る道が示されている。「なんじゃこれは」

駒返峠でどう歩き回ってみても、こんな所に道があることはわからない。ひどい。私の地図は五万分の1だがこの地図でもこの道はわからない。指導標や地図に頼るのがいけない。九州の山は人が少ないのだから情報が少ないのはし

かたがないと言われるかもしれない。しかし人が少ないからこそ、その人の身になった情報を提供して欲しい。

■ 矢部の通潤橋はすばらしい。

九州自然歩道に入



ってしばらくは快適だったが、また指導標が消えた。そんなはずはないと思っていたら、はるか高台に大きな指導標がある。分かれ道は二人の目にはまったく見えなかった。かなり腹が立つ。

稲生野のバス停の近くの指導標は 90 度間違った方向を示している。我々は上から降りてきたから間違えないが、この標識を見た人はだれでもその方向に進むだろう。

稲生野からは快適な舗装道路が矢部町の中心街である浜町に続いている。御所という集落でコーラを買う。店を任されているオバチャンは「昔は熊本に出るのに駒返峠を越えて中松駅から鉄道に乗った」と教えてくれた。下島さんが

「どのくらいの時間がかかったの？」と聞くと

「稲生野から峠まで二時間だった」という。浜町までも二時間かかるから山越えの方が便利だったという。我々は下りで二時間近くかかった。オバチャンはこともなげに二時間と言ったが、当時はそんなに道も良くなかったはずなのに。

「小倉から走ってきた」と自画自賛していたが、オバチャンにとっては「それがどうした」



という感じだ。さすが九州。やはり長距離走歩文化の源流は脈々と流れていた。

そんな人たちからみれば、我々はなーんにも大したことをしているわけではないことを思い知らされた。しばらくは自画自賛を自粛することにする。

だらしない走りで、柔道の山下泰裕選手のふるさと、**矢部**の町にはいる。有名な**通潤橋**を見に行く。たしかにすばらしい橋だ。この素晴らしい橋の前で今回の走り旅をやめることにした。できたら**砥用**まで行こうと考えていたが、良いきっかけに出会ったことで、九州第一弾は終了。

台風による崖崩れのため熊本行きバスは砥用町まわりになっていた。おかげで次回の下見ができた。

熊本では時間があつたので熊本城見学をした。今夏、日本アルプス立山のさらさら峠越えマラソンをした下島さんにとって、おもしろい出会いがあった。加藤清正の前の城主は冬のさらさら峠越えをした**佐々成政**だったのだ。

今回は予想外の暑さには参ったが、快適な旅の一語につきる。

みわかずひこの走り旅

第6章 - 2

南阿蘇から佐多岬へ 1999年12月



九州第2弾（南阿蘇矢部町から五木村・桜島経由佐多岬まで300キロ）

今回は阿蘇南麓の矢部町から九州最南端の佐多岬までの300キロを5日間で走った。これまでに北海道縦断、東北縦断、東海道伊勢周り、山陽道、沖縄先島諸島、そして九州北部を阿蘇まで走ってきた。

今回の南九州を走って、とりあえず日本縦断を終えることにした。終えたからってなんてことないのだが、一応ケリをつけといた方がいいかなと思ったからだ。スタート地点もゴールも自分で勝手に決めるのだから簡単だ。

佐多岬まであと8.5キロという大泊の集落に着いたところで、今回最大の問題に出くわした。予想していたが、役場で聞くとロードパークは自動車専用道路なので人や自転車は通さないと言う。ここで涙を吞んだ日本縦断自転車族も多い。ゲートが閉まる午後6時から翌朝8時までの間は、人や自転車の通行が黙認されるが、そんなお目こぼしで行かせてもらうのはいやだ。通してくれないのなら、誰が行ってやるか。

と思うものの、せっかくここまで自分の足で来たのに、佐多岬も見ずに帰るのもしゃくだ。最後の最後で、すっきり完結しないというのは、これまでの私の人生を象徴しているようだ。解決の方法は、「国立公園内で自動車専用有料道路など作っていいのか」とお上に言上する正攻法か、「まあいいか」とあきらめてここで日本縦断完結とするかのどちらかだ。しかし私はこれまで第3の方法、抜け道を見つける方法で切り抜けてきた。今回もそれが存分に発揮された。

途中の田尻の集落までは一般道が着いている。そこから海沿いに歩いて崖を登れば岬に出れそうだ。その方が近道で、ほぼ5キロで岬のトンネルまで行くことができる。田尻の集落の人は歩いてきたことを知って「気の毒だね」と言うものの、この先の崖は登れないと断定する。人のいなくなったのを見計らって小さな谷を上ってロードパークに出る。自動車が来たら隠れようと思ったが一台も通らなかった。結局、役所の人との戦いもなく、ゲートの前でくやし涙を流すという劇的幕切れもなく、なんとなく抜け穴を抜けて佐多岬に自分の足でたどりついた。ドラマにならない私の人生を象徴するかのようなとりあえずのゴールだった。

■ 矢部まで

熊本空港までの割引切符を手に入れたが、空港から前回の終点の矢部町まで行くのは結構厄介だ。直線で行けば近いのに、空港バスは全部市内のセンターに行く。

今回の相棒は前回と同じく下島伸介さん。彼なら空港から走り出すことにも

違和感はないだろう。しかし空港から歩いて外に出るのはなかなか難しい。羽田空港から家まで走って帰ったことがあるが、空港の外へ出るのが一苦労だった。熊本空港でも歩道はついていなかった。

外へ出たが西も東もわからない。空を見るともうオリオン座が輝いている。三ツ星の延長線が東西方向だ。昔砂漠の民は三ツ星をたよりに目印のない砂漠を旅した。空港を出た瞬間からわれわれは、**砂漠の旅人**の気持ちになった。国道 445 線に出るまではかなり不安があったが、あとは適当に走り、恐竜博物館がある**御船町**の寿旅館で泊まる。この矢部まで山道になり泊まる場所はない。夜遅くなったが、近くの焼鳥屋で前途の安全を願って一杯。地元の人としてすっかり意気投合したのはいいが、明日の体調が気にかかる状況になった。

◆ 12月10日（金）矢部から二本杉峠

まだ空いっぱいの星空の中、タクシーをたのんで矢部まで行く。御船から矢部まで 25 キロある。朝飯前の足慣らしというにはちょっと長すぎる。30 分ほどで、前回終点にしたなつかしいバス停車場についた。まだ始発には早い時間だったが、一応待合室に入って「戻ってきましたよ」とベンチにささやく。

東京とはほぼ 1 時間日の出の時間が遅い。6 時 30 分頃にやっと薄明くなる。暖かい冬だといっても明け方は吐く息は白い。暖くなるまでは防寒着のままトロトロ走る。古い道は緑川に沿って**内大臣橋**を通っている。内大臣という名の集落から椎矢峠を越え**椎葉村**に出る林道はオフロードバイクのあこがれの場所らしい。私たちは日本の秘境中の秘境と言われる**五木村**へむかう。そこへ入るには二本杉峠という難所をこえなければならないので寄り道はでき



ない。**砥用**（ともち）町までは国道 218 号、別名みちくさ街道をいく。砥用は石橋の町として有名である。矢部の通潤橋が知られるが、緑川にかかる霊台橋はもっと立派である。この橋がよく見える展望台でついみちくさを食ってしまう。2 時間半で 15 キロの距離をす

すみ、砥用につく。交差点に今日の目的地まで五木村まで 40 キロの表示があった。「あと 40 キロ、今 9 時だから 3 時頃にはつくんじゃないか」と気楽な気分になった。土喰の集落で大根を干していたおじさんに聞くと、二本杉峠まで 17 キロだという。10 万分の 1 の道路地図ではもっと短そうだった。「最近の田舎の人は自動車ばかりなので距離感覚がなくなっているんだよな」と勝手に解釈していた。何個目かのヘヤピンカーブでショートカットしようと、ほぼ垂直な擁壁に掛かったはしごを登り、しばらく進んだ。しかしそこは工事中の行き止まり道だった。間違えた道に戻るのは倍ぐらの距離を行く気分だ。

ここは国道 445 号線だが、下津留の集落より先は林道並の難路だ。峠の周辺だけは 2 万 5 千分の 1 の地図を持ってきたので、再びショートカットをするつもりで谷間の小道に入ったら、下島さんが珍しく「止めましょうよ」という。さっきの失敗と前回の研石峠で迷って鹿の死体に出っくわしたことを思い出したに違いない。もし一人だったらきっと突っ走って体中傷だらけになっていたに違いない。相棒がいると冷静に判断で来てありがたい。

峠までは 3 時間半かかった。土喰のおじさんの言葉にまちがいはなかった。17 キロ来たのだから、五木村までは残りは 23 キロの計算だ。峠は野球場がいくつも出来そうな広場で、ドライブインもあった。山菜うどんをたべたあと、宅急便の運転手に道を聞くとあと五木村までは 35 キロあるという。「エエッ、そんなバカな。3 時間半もかかって 5 キロしか来ていないはずはない」と憤慨し、焦ったが。東京に帰って写真を現像してみると、砥用の交差点の表示は「五家荘」まで 40 キロとあった。勝手に五木村と五家荘がおなじ場所と思っていた方が悪い。

■二本杉峠から五木村頭地

峠を出発したのが 1 2 時半。時速 7 キロで走っても 5 時間かかる。東京より日の入りは遅いといっても、頭地につく頃は真っ暗



になる。暗くなって宿探しの不安だが、今回は珍しく予約してある。二本杉峠からの下りも人の気配がなく、寂しい。砥用側とは違って道路は直線状で歩道もついている。10 キロをほとんどノンストップでかけくだる。こんなときの気分は実にいい。「おれは生きてるぞ。走れるゾー」と叫びたくなる。途中から道路は昔のままの断崖絶壁をぬうような道になる。崖崩れ復旧工事のために全面通行禁止時間があるので、車はまったくこない。だれもいない観光用の巨大な吊り橋を右手に見て、1時50分に**下屋敷**という集落につく。緒方家という立派な旅館がある。五家荘は**平家の落人の里**として知られるが、平氏はここでは緒方と名を変えて隠れ住んだという。その一族から江戸時代佐倉宗吾という義民がでたという。「あれ、**佐倉宗吾**は千葉県印旛沼の人じゃないの？」いやいや彼は緒方家の次男として生まれ、後に下総の木内家に養子に行ったのだそうだ。

下屋敷をすぎたら1時間ほど走ってもほとんど人家はみえない。3時になってやっと**椎原**についた。ここにも緒方家の旧宅がある。五家荘は山間に点々と平家の落人が住んでいたらしく、川沿いにはこの椎原以外ほとんど人家はない。

下ってきた川は、日本一の清流として四万十川よりきれいと言われる**川辺川**なのだが、谷が深すぎて清流はちっとも見えない。これだけ人が少なければ汚れるはずもない。椎原で道を聞くと「頭地まで20 kmある」という。相当走ってきた気がするが、それでもまだ20 kmというのは遠すぎる。久々の長距離ランニングなので体がなれていないのが原因だろう。

暮れていく光を追っかけて、川辺川を走る。清流のはずが川の工事で結構汚れている。下島さんは「日本一の清流だっていうから来たのに。濁流じゃない

か」と嘆く。五木溪谷をでて、川幅の広がったところが**宮園集落**だった。小学校があり子供たちが遊んでいる。聞いてみると全校生徒30人ほどの学校だ。「昔は100人以上いたんです」と先生らしい人が話してくれた。もっと子供たちの話を聞きたかったが、すでに4



時半。頭地までまだ 8 キロある。川はそこら中が掘り返され、高いところに新道が付けられている。

川辺川ダムが建設されるためである。もうここには昔の清流はなくなった。宮園の小学校は水没を免れるが下流の集落は水没するという。 **五木村**の中心である頭地に入る頃にはすっかり日が暮れてしまった。ランドセルを背負った子供たちが下校する姿だけがあった。変な姿をした二人のおじさんに「こんにちわ」と声をかけてくれる。いい子たちだ。 予約をしておいた旅館はジイさん、バアさん二人でやっていた。まもなく水没



する予定地で、建て直しもできない古い建物だ。ここ数ヶ月泊まり客はいなかったようだ。この山の中で暖房はこたつだけ。二階の広い部屋を全部使わしてくれたが、寒さがいっそう身にしみる。

「いつダムはできるの?」と聞いたらバアさんは「いつのことになるかわからない。造らせない」とキッパリ言った。

◆12月11日（土）頭地から人吉へ

6時半、まだ薄明かりの中、出発。頭地の背後の高台を新しい国道が通っている。集落をすぎると車は上の新しい道を通るようになっている。私たちは旧道をいく。車はまったくこないので安心して道の真ん中をいく。遙か上部に移転する団地のような造成地が見える。旅館のジイさん、バアさんはあんな所に

移転したくないだろうなと思う。下流の集落は皆移転し、建物は土台のコンクリートを残すだけとなっている。いったい誰のために何のためにこれだけの犠牲をはらわなければならないのか。昔決めたことだけど、今は自然を残すことの方が大事だと人々の考えも変わった。それなのに相変わらず、日本列島改造では、「国も破れて山河もなし」になってしまう。登山家の下島さんも憤慨すること多々。清流のはずの川辺川の水は他にとられ、川床は岩の原になっているところも多い。旧道を行くとやがて道は取り付け道路に上り、椎葉谷川の奥まで迂回させられた。目の下には巨大ダムの建設予定地が見えている。何年か後にはここに大きな湖ができ、観光客が押し寄せ、「自然っていいなあ」などといいながらアウトドアライフを味わうのだろう。その時、あの旅館のジイさん、バアさんはどうしているのだろう。

ダム予定地をすぎると川幅は広がり、田や畑がでてきて急に人の気配が濃くなる。かなり走ったが、道路標示 15 キロに 2 時間半かかった。9 時に瀬馳につき、橋を渡って国道 445 線にでる。川幅が広がった川辺川は並の清流で、四万十川に比べられる程ではなくなった。広々とした両側の田畑に今は作物はないが、豊かな地域であったことはわかる。人吉は相良氏の城下であった。歴史の表舞台に出てくることはほとんどない弱小藩だったが、内情は結構豊かなことだったのではないだろうか。

段丘上の相良村深水をとおり、役場の前で左折し川辺川をわたる。柳瀬橋で再び川を渡ると舟場という地名だった。昔の船着き場の面影が残っている。ここで昼飯、11 時 30 分。いつの間にか九州自然歩道になっている。高速道路の下をくぐると頑成寺町。そこから三たび川を渡る。この川は川辺川が合流した



九州第二の大河、**球磨川**である。曙橋の上から人吉の町をみると、筑後川に沿った日田の町と感じがよく似ていた。ともに河川交通の要衝で、山地との物資の集積場だったからだろう。

■人吉からループ橋

曙橋をわたると次は**加久藤越え**、**堀切峠**の難所が控えている。**肥薩線**は大きくループを描き、スイッチバックで矢岳トンネルを抜けている。国道 221 号線は大きなループ橋をまわって加久藤トンネルを抜けている。九州横断道路は最後まで難工事だった場所である。

来る前に東京神田の内外地図で「肥後おおばたけ」の 2 万 5 千分の一の地図を注文したら、「**肥後おこば**」ですねと訂正された。この地図は鉄道ファンにはなじみの場所らしい。大畑と書いて「おこば」とはだれも読まないよ。

大畑小学校の前を 1 時に通過し、いよいよ山にはいる。ここは海拔 200m。堀切峠は 730m だから 500m 以上登らなければならない。おそらく 2 時間かかるだろ。なんとしてでも明るいうちに峠を下りたい。**鳩胸川**の川幅はどんどん狭くなり、谷の奥にループ橋が見えてきた。国道は大きく右に回って行くが、旧道が左手に登っている。当然こちらの道をいくが、二人の人が降りてきて、「草を刈っていないから行けないよ」と言う。忠告はありがたいが、草ぐらいで旧道をあきらめることはない。予想通り 2 階建てのループ橋の下の階にでる。2 時 15 分。ここを半周して**久助谷**をさかのぼる旧道に入る。ことしはやけに暖かく 12 月に入った今やっと紅葉が始まった。九州の山は杉山ばかりだったが、このあたりは気分のいい落葉樹帯だ。

「この道は峠なんかないよ」車の人の話にちょっと不安を感じたが、今回は 2 万 5 千分の一の地図がある。舗装がとぎれた旧道を 6 キロほど行くと下の国道の車の音は消え、県境の表示が出てきた。熊本県から鹿児島県と思いきや。熊本・宮崎の県境だった。峠はさらに進んだ場所にあった。ふつうは峠が県境だろうに。何の表示もない寂しい峠で貧しいおやつを食べ、九州 4 県目を祝う。まだ 3 時 30 分、峠を下るまでは明るいだらう。

気分は楽になる。

ところが峠下の加久藤の地図がどこを探してもない。東京に忘れてきたらし

い。しばらく下るとトンネルをでた国道の車の音がする。国道の下りにも霧の大橋と雲海トンネルを組み合わせた2層のループ橋がある。鉄砲うちのオジサンの「どこまでも旧道沿いに行けばいい」という忠告を聞いてかけ下る。底の薄いランニングシューズの下島さんは砂利道がじかに響くらしく、「足の裏が痛いよ」

眼下には九州第3の川である**川内川**が光っている。目的地の**京町温泉**とはまったく反対方向に道は向かっているが、地図がないので旧道を忠実にたどるしかない。国道268号線に合流する標識は日本語とハングルが書いてあった。えびの市には韓国岳がある。国際的なのだ。走ると脳細胞が破壊される。「えびの」ってどういう字を書くのか、二人ともわからない。

今日も夕闇の中、京町温泉に到着。65キロを11時間できた。「走り旅と温泉」は私のあこがれだったが、火山島の九州では簡単に実現する。夕食は近くのファミリーレストラン。下島さんは快調そのものだが、私は腹の具合が悪く、うどんしか食べれない。毎日パソコンに向かう生活をしていたのが急に朝から晩まで走る生活に変わったのだから、体もとまどうにちがいない。食欲はなかったが、昨日と違って暖房も温泉付旅館なのでゆっくり眠れた。

■ 12月11日（日）京町温泉から溝辺十文字

今日も朝6時半に出発する。空はまだ真っ暗で一面の星空。毎朝明けの明星を見るのは何年ぶりか。空が明け始めた頃、二人とも急に催してくる。近所にトイレなどない。山の中でならどこでも大丈夫なのだが、一応国道脇だ。ちょっとはばかられるが、畑の脇にしゃがむ。草の背丈があるので道路からは見え



ない。ちゃんと土をかけて置いたから迷惑はかからないと思う。

道はすぐに鹿児島県境につく。「おこば」でスイッチバックしていた肥薩線は**吉松温泉**で**吉都線**と合流する。

霧のはれた前方の空に突然キノコ雲が上がった。もしや桜島

が噴火したのではないかと思う。自販機で缶コーヒーを買っている人に聞いたら、「あれは栗野岳だ」という。昨日から九州の人の言葉を信用するようになったが、今回は信用できない。

桜島かどうか確認できないまま、**栗野町**を9時に通過。南流していた川内川はここで方向を変え北流する。われわれはここから南下する。栗野は山から川からの物資の集散地だ。**横川**（10:15）で肥薩線と離れる。ここからは東西に並ぶ丘陵のひだを一つずつ越えながら鹿児島湾に向かう。いくつ峠を越えたかわからないが空港ゴルフ場が出てきた。もうすぐ空港だと思うが、飛行機の高度はまだ高い。

今日は朝の便で妻の倫子が来ることになっている。到着したら電話があるはずだ。11時30分空港へはいる十文字の交差点手前で、「いま空港を出るところ」との連絡が入る。前回の走り旅から、**携帯電話**を持たされている。どこかで行き倒れになったときの連絡のためだ。

そんなもの毛嫌いしていたが持ってみると案外便利なモノだ。田舎では通じないと言われたが、山の中でもけっこう通じる。今はエベレスト登山でも南極、北極探検でも通信手段を持っている。一人の個人的行動も常に監視され、劇場的演出が入るのではないかと危惧するのだが、私の場合はあくまでも、徘徊老人の監視という目的なのでいいことにしよう。

しかし本格的探検には、必要ないもののはずだ。「だれも助けを貸してくれない」という孤独な環境が探検、冒険の一つの条件なのだから。

有川のコンビニで今日もお昼。12月というのに本当に暖かい。昼間はロングタイツと長袖のTシャツ一枚で汗をかくぐらいだ。お昼を食べて小さな坂道



を登り切ると、目の前に突然**桜島**があらわれる。「おお、すごい」今朝のキノコ雲は確かに桜島の噴煙だった。

峠に向かうときいつも、「あそこを越えれば別の世界が開けているだろう」という期待がある。この期待が旅

の原動力かもしれない。

農作業中のオバチャンは、桜島の噴火にまったく驚いていない。富士山がこんな噴火をしたら大騒ぎになるだろうが、このあたりでは日常茶飯事らしく、「そうだね、こっちに



は降ってこないから」と関心を示していない。二人で感動して写真を撮っているのに拍子抜けだった。

感激を終えて坂道を下ると、鹿児島国際ゴルフ場の入り口に倫子が、走り仲間の**中山嘉太郎**さんが作ってくれた横断幕を広げて待っている。空港からローカルバスで**加治木町**まで行き、そこから**龍門司**焼き窯場のお祭りの送迎バスに乗ってきたという。これは素人ではなかなかできる芸当ではない。だてに東海道以来「走り旅・追っかけ」をやっているわけではない。わが妻ながらさすがと誉めたい。お昼は食べたばかりだったが、餌付けされる。(1:10)

■ 加治木から鹿児島

腹一杯になって空を向きながら加治木の町まで駆け下りる。頂上に日の丸を立てた岩山がそそり立っている。このあたりはすべて**シラス台地**。もともとは鹿児島湾は巨大な火山の火口だった。数千年前とんでもない規模の大噴火があり、大量の火山噴出物、シラスを噴き出したので海面下まで陥没し、海になった。桜島はその火山の外輪山の一つなのである。

下島さんは九州縦断を玄界灘から鹿児島湾と決めていたので、海辺の加治木で終了、今日の最終便で東京に戻ることになっている。時間はまだ2時、桜島を見ながら余韻を楽しんで**重富**まで一緒に走る。宮崎からの国道10号線は車で一杯の道だった。今回車に悩まされた道はここだけだった。重富の駅で、記念写真をとって、名残惜しいが別れる。いったん列車で鹿児島に出て、風呂に

入ってから空港に向かう下島さんと倫子を置いて、私は一人で鹿児島市街に向かう（3:10）。雨着と着替え、懐中電灯などを倫子に預けたのでザックは軽くなった。快調にとぼしていると**大崎の鼻**の手前で二人を乗せた列車が追い越して行く。国道は鼻をまわるが、列車はトンネルに入る。快調な走りを観客に見せようと飛ばしすぎた感じだったが、3日間もウォーミングアップしてきた成果があらわれて、2時間で15キロを走りきった。

国道10号線は海辺で気分はいいのだが、歩道がない場所が多く走るのに快適な道ではない。

桜島栈橋に最も近いビジネスホテルに泊まる。鹿児島の繁華街天文館通りを見物する。鹿児島はでかい町だ。**山形屋デパート**周辺を歩いたが食べたいモノが何もない。私はふだんでも食べたいモノというのがない。人間の欲望の一つである食欲がほとんどないのだから「人生、何を楽しみにしているのだ」と走友の江本さんにバカにされる。私は丸薬一粒で一日もつのならそれでいいのと思っている。

しかしふつうは「今日は何を食べようか、何を飲もうか」が楽しみなのだろう。倫子には悪いが、レストランは止めてデパートの地下で買ったおむすびなどをホテルの部屋で食べることにした。

■ 12月12日（月）桜島から古江

6時、倫子をおいて桜島に向かう。この**フェリー**は一晩中運航している。桜島は火山の島かと思っていたが結構たくさんの人が住んでいる。昨日から煙を噴



いているのに恐ろしくないのだろうか。慣れというモノは恐ろしい。世界でも活火山のこんなそばに大都市があるというのは例がない。

島の中の道は歩道の整備が良い。走るのには最高の環境だ。いつもは朝早く走れないのだが、今日は荷物も軽くなったおかげで快適

に走れる。しかし火山灰を含んだ空気は体には悪いだろう。**桜島** **栈橋**から大隅半島にくつつく桜島口まで13キロある。途中の**古里**には大きなホテルがある。島中どこからでも温泉が出そうだけど南側海岸ではここしかない。古里温泉をすぎる頃から火山灰はだんだんひどくなってくる。北西の季節風によって島の南東側に灰が降る。手ぬぐいをマスクにして歩くが、目にも砂が入ってくるので痛い。水中メガネを持ってくれば良かった。有村町にきて驚いた。新しくできた橋の下の集落は、火山灰のため廃村になっている。家々はつい最近まで住んでいたようだが、屋根や庭には灰がつもっている。建設省の道路清掃車がとおるが、清掃中のオジさんは「いくらとってもすぐ積もるからしょうがない」とあきらめ顔だった。

大正3年の噴火のときに流れ出た溶岩で桜島は**大隅半島**とつながった。その後昭和時代21年にも大量の溶岩が流れた。その溶岩を切り開いて道路が通っている。そこでバスに乗った倫子に追い越される。そのバスを追って桜島口までダッシュでかけ下る。そこにはほんの数軒人家があるだけだった。(9:10) 次のバスが来るまでしばらく一緒に歩くことにした。これまで一瞬会うだけで走り去っていたが、時には一緒に歩いてみるのもいい。これぐらいの余裕を持った走り旅ができればいいのだが、途中でゆっくりするとその分だけ後につけが回ってくる。

明らかに遅れを感じるが、ついてきていただいているのだから、しかたない。



次のバスが来たときには「ホット」した。倫子は**垂水**まで乗っていった。私はこれまでの遅れを取り返すためにかなりのスピードで走った。まだ多少火山灰は降っているが、

海を見ながら走るのは気分がいい。垂水の港で倫子に一瞬会った（10:30）だけでいつものように、私は走り去る。

今回は携帯電話があるのでお互いの位置を確認できて助かる。垂水を過ぎたところに連続して温泉工場があった。温泉のお湯をペットボトルに入れて販売している。ちょっと飲ましてもらっていると、「奥に温泉があるから入って行ったら」と誘ってくれる。「自転車日本一周の人なんか入って行くよ」と言われたが、今日はまだ先が長いので遠慮する。温泉の湯は海草エキスが入ってるとかで、体にはいいらしい。

倫子の乗ったバスは**鹿屋**行きで、私たちの目指す**根占**には行かない。そこに行くバスは鹿屋で乗り換えなければならない。三角形の二辺に行くことになるので、倫子は海岸沿いに歩いて進むと連絡してくる。距離は 10 キロある。私は温泉の湯を飲んだので快調で、鹿屋への分岐点である**古江**の町には 12 時半についた。ここには**国鉄大隅線**が通っていた。今は駅舎が公園になっている。古江から根占へ

倫子は 5 キロ先の**天神岬**にいるとのことなのでスピードアップして 35 分で到着。車はみな鹿屋へ行く道に入ったので、走るには最高の環境になった。天神崎の駅舎公園でお昼を食べてのんびりする。今日はスピードが速いのでかなり休憩をとっても明るいうちに根占に到着できそうだ。天神崎からは鉄道跡の遊歩道をたどって走る。快適の一語。**高須**の入り口で県道に合流した。目の前に宅急便の軽トラックが泊まった。降りてきたのは倫子だった。

「あれ、何してんの？」まさに偶然の出会い。お互いに驚く。10 キロを昼飯時間を入れて 1 時間でついた。

国道に出るまでの 1.5 キロをまた一緒に歩く。

高須は、わが弟子である**田中雄次郎君**が 20 年前、**日本徒歩縦断**を目前にして、高熱を発して神社の境内で倒れたところだ。幸い翌日、復帰して **67 日間**で佐多岬にたどりついた。この間に使った経費は 4 万と 1 円。20 年前とはいえ、これだけの費用で 2 ヶ月も旅をした人はいない。彼の旅は、「旅する巨人」のモデル**宮本常一**さんが感動し、「民俗学の旅」という本にも紹介してくれた。

田中雄次郎は宮本先生の一番最後の一番若い弟子と言ってもいい。彼が宮本先生を見舞った日、医者 of 制止を無視して雄次郎とながら時間話をした。彼の

ような本当の旅をした若者の姿に宮本先生自身の若い頃の思い出が重なったのではなからうか。しばらくして先生は亡くなった。

高須に根占行きのバスはなかった。地元の人に聞くと「すぐその先に、坂本からのバスがある」という。「すぐそこ」は信用していなかったが、本当に1キロぐらいで浜田のバス停があり、根占行のバスが30分後にあることがわかった。(2:20)今日は宿を取っていないので、倫子にバスで先にいって探してもらうことにした。



■根占まで

大根占まで11キロ、根占はさらに5キロある。しかし今日の調子では2時間で行けるだろう。時速8キロというのは、私の走り旅では最高スピードであるが、海沿いの道は快適で、飛ばすことができた。**神ノ川大橋**に3時15分。大根占に4時についた。なんで大根占と根占があるのだ。大がつく方が実際に大きな町ようだ。泊まる予定にしていた**ネッピー館**が今日は休みだと連絡が入る。「他をあたるから」という声に「どうしよう」という不安な気分になる。港町だから一軒ぐらい旅館はあるだろう。予想通りの時間で根占の町につく。4時半。

62キロの距離だったので、今回初めて明るいうちに到着した。平地ならこれぐらいの時間で走れる。九州の山の中は厳しかったのだ。川の袂の**根占旅館**でとめてくれる。広い部屋で食事もし立派だった。九州縦断のフィナーレを飾る宿はなかなか良かった。

■根占から大泊、佐多岬

6時30分、一人で宿を出る。今回は一日も雨が降らなかった。岬に立つときは晴れていて欲しいと思っていたが、これほど毎日いい天気が続くとは思っ

ていなかった。神に感謝！

4日間のウォーミングアップのおかげで足は快調そのもの。対岸に開聞岳を見ながら1時間で薩英戦争の砲台跡をすぎる。子供たちの登校時間になるとほんとうに全員が挨拶してくれる。九州へ来てから子供たちの挨拶の良さには驚く。挨拶ができる子は何をさておき、いい子なのだ。「それに比べ・・・」とは言うまい。

海岸まで山が迫っているが、この岩山は花崗岩でできている。火山島の九州では花崗岩はほとんど見ていない。山梨の昇仙峡のような山が本当の山だと私は思っているから、ここの景色はなんとなくホットする。海岸の砂利も白い花崗岩礫なので気分もいい。

海岸を走るのは、調子のいいときにはいいのだが、ダメなときには「あの岬までいかなけりゃいけないのか」と気分は減入る。今日は「あの岬まで30分！」という気分だ。だんだん「つわぶき」の黄色い花が目立つようになる。ソテツは南国に来たという気にさせてくれる。荳という集落があった。「おろ」と読むそうだ。始めてみる文字だったが、ワープロにはあった。気分がいいと周りに目が向くものだ。

8時55分、佐多町役場のある伊座敷につく。2時間25分で18キロというのは朝にしてはいい速度だ。役場に先回りして情報収集していた倫子の話では、予想通り大泊から先のロードパークは人は歩けないとのことだ。



「北海道の宗谷岬から歩いてきたんですが」

と言っても、役場の力ではどうにもならないとのこと。

ゲートのおばさんもおじさんも決められ

ていることには忠実だから、交渉しても無駄だとのことだ。暗い気分で大泊に向かう。実際にそこで日本縦断を終わりにする人たちもいるようだ。

しかし私は岬の見えるところまでは絶対に行きたかった。役場でもらった詳細な地図では、**田尻集落**までは問題なく行ける。田尻から先は海沿いに行って崖を登ってやろうと考えた。

伊座敷から山越えはなかなかの登りだ。西方の集落の中を登る道があるはずだが、工事をしている人たちが「ダメだ」と言うからしかたなく大回りをした。トンネルから下りは快適そのもの。

「ウォー」と叫びながら走り降りた。小さな**尾波瀬漁港**を過ぎ、坂道を上り降りすると**大泊**まで直線。だいぶ先に倫子の姿が見える。もしかすると最後になるかもしれないので、ラストスパートをかける。大泊到着 10 時 30 分。道路標識は 13 キロとなっていたが、道が直線に付け替えられているので 10 キロ程度だった。

さてそこから今回最難関の**ロードパーク**だ。昔国民宿舎だったなんとかセンター脇で海を見ながら昼飯を食べ、策を練る。バスはしばらくないので倫子も一緒に歩くことにした。重い荷物は私が背負って小さな峠を越えて**田尻集落**に向かう。途中からロードパークに入るがこれは田尻に行く道だから咎められることはない。車が 2 台通ったが大丈夫。 観光船の乗り場には誰もいなかった。白い砂浜、き

れいな海、シーズン中は多くの人
が来るのだろうが、今はもう冬、
だれもない海。

冬だというが
ブーゲンビリア
の青、ハイビスカ
スの赤、つわぶき
の黄色の三色が



佐多岬

随所に出てくる。ここは南国だ。

田尻の集落に入る。奥には第二ゲートがあるがここのオジサンが難関なのだろう。集落の上には道路があるのがわかる。やぶこぎ道を探していたら地元の人と会う。

「ずーと歩いて来たから、最後に車には乗りたくない」

という話をしたら同情はしてくれたけれど、

「法律で決められたなんとか道路から、通っちゃいけない」

実はその時、そのおばちゃんは、言っちゃだめだけどと念押しをしてから

「その先の澤のところから上がる道がある、地元の人は歩いている」

とつぶやいてくれた。

引き返すようなふりをして、澤を上りロードパークに出る。北緯31度の標識の前で写真を取り、自動車が来ないことを願って歩く。岬をまわったところから佐多岬の灯台が見えた。

「ヤッター！ ここが田中雄二郎が目指した岬か！」

佐多岬灯台はトンネルを抜けたさらに先の小島にある。その姿を雄二郎はスケッチに残している。雑誌「あるくみるきく」に乗っているスケッチをここに借りておく。彼は67日間ひとりで宗谷岬から歩いてあるいてきた。私は皆に支えられてきても大感激をしたのだから彼の場合感激はいかばかりだっただろう。

■岬を所有していいのか？

国立公園の中で歩行者を締め出して有料道路だけを通すってのはおかしいんじゃないか。ここは鹿児島交通の親会社が土地を所有しているというが、国



立公園に指定された場所の道路を使って通行料を取るなんておかしい。

全国の日本縦断歩き旅、自転車旅、のみなさん「佐多岬歩かせろ」運動ってのをやりましょうよ。

走り仲間の越田、浅井グループの人たちもその年九州横断ランニングをしたがゲートの開く前に密かに走ったという。私のように昼頃着いたら翌日までどこかで待たねばならない。それは困る。

本来は自動車は締め出して人間優先の道にするのが国立公園の設立趣旨だろうに、本末転倒だ。ぜひぜひロードパークを歩く道、自転車優先道にしてほしい。

■私の「最南端」は開聞岳ということにしよう！

せっかくのフィナーレだがあまりいい気分ではなくなった。さらに気分を害したのは「本土最南端」という看板だった。私たちの年代では「本土」という言葉は沖縄や北海道に対して自分たちは別格だという蔑視の感情があった。戦争中本土を守るためには沖縄を犠牲にすることはいとわなかった。私は本土と言う言葉を忌避している。ここは「九州最南端」でいいのだ。本土最南端は沖縄県の波照間島である。

佐多岬の展望台に立って海を見ていた。南の方から船で来ると最初に見えるのは最南端の佐多岬ではなく薩摩半島先端の開聞岳ではないかと思った。3次元的に見れば海拔922mの開聞岳こそが九州最南端だと考え、急いで根占からフェリーで鹿児島



湾を渡り薩摩半島の山川港に行きそこで泊まった。

翌日自衛隊の若者たちと一緒に山頂を目指した。円錐状の山の登山道はぐると 360° 回りながら上がるようにつけられている。樹木に覆われているので景色は悪いが時々木の間から海が見えたり海岸線が見えたり池田湖の姿が見えて退屈しない。屈強な若者と一緒だったので 2 時間ほどで頂上に立つ。頂上には小さいながら火口の窪地があり鳥居が立っていた。頂上から見る海のかなたは、たぶん佐多岬から見たよりもはるかに彼方が見えるはずである。

気分を良くして、九州最南端への旅を終了した。そして 1999 年 12 月、20 世紀最後の月も終了した。次の 21 世紀、いよいよ日本最南端、最西端の走り旅を始めることを決心した。

日本列島 縦断走り旅（ジャーニーラン） 報告書あとがき

若いころ大学山岳部にいた。山に登ったあとには報告書を出すという習慣がっていました。その後小さな山登りでもメモを残すようにしています。

ただ走りっぱなしでは「走り旅」が完結したような気がしません。いろんな人にお世話になったりご迷惑をかけたり応援をしていただいた人のためにも報告書を作らなければいけない気になりました。自分自身でも文章を書いていると走っていた時の景色や気分が思い出され、「オオーッここまで走ってきたぞー」と言う気分になります。

今回の報告書はこれまでの「走り旅」の報告書をつなぎ合わせて「日本列島ほぼ縦断」としたものです。1977 年田中雄次郎君が完璧な日本縦断をしたのに比べ私のはかなり抜けている部分があります。そこで表題は「ほぼ」としました。

ここ数年日本縦断走り旅だけでなく、本州輪切り旅、島々走りなどやってきました。陸続きになった「しまなみ海道」は 10 回も行き来しています。

「そんなに走ってばかりいると脳細胞が破壊されるぞ！」

と脅かされたが、最近それが現実となり脳内までカテーテルが入りました。しばらく休養、リハビリでパソコン生活になっている間に回復し、こんな報告書を作ることができました。

走ることができる、報告書を作ることができる、まさに健康あつてのことであることを最近少々悟りました。

来月は海宝さん主催の「しまなみ海道 100 キロ遠足」に参加して瀬戸内海を眺めてくるつもりです。懲りないねと言われそうですが・・・

2000 年 6 月 1 日